

## 愛知県公立高等学校入学者選抜制度の改善に関する検討会議（第1回）議事録

日時 令和2年6月8日（月）  
午前10時から午前11時30分まで  
会場 愛知県庁本庁舎 正庁  
欠席 角谷委員

開会 高等学校教育課課長補佐

教育委員会挨拶 愛知県教育委員会教育長

座長・副座長の選出 座長 村上委員 副座長 川瀬委員

座長挨拶 この会議がどのような理由で開催され、何が課題であるのかと  
いったことについては、教育長の挨拶の中で説明があった。  
入試制度というものは極めて多面的、多角的に考えなければい  
けない問題である。そのことを一番よくわかっているのは、学校  
の現場あるいは保護者ということになると思う。  
したがって、この場ではそれぞれの立場から自由に、特に本日は  
何らかの結論に到達するというものではないので、感じている  
こと、考えていることを率直に発言してほしい。

副座長挨拶 私は臨床心理学を専門にしている。かつて2歳半で出会った子  
が、先日、大学を卒業した。水泳をずっとやってきて、スポーツ  
ジムに正社員で入ったという手紙をもらった。  
彼は公立小学校、公立中学校に進んだ。知的には高い児童だっ  
たので、特別支援学級に入ることはなかったが、高校受験のタイ  
ミングに合わせて社会性などをいかに成長させるかということが  
課題であった。  
今思い返すと、高校受験が子どもたちの成長にとって一つの契  
機になるということを痛感する。愛知県の高校入試では、独特の  
システムが多く先生方の努力によって維持されており、子ども  
たちが生きていく、成長していく中で重要なポイントになってい  
る。そこに携わることができることを非常にうれしく思っている。  
議事進行への協力をお願いしたい。

座長 それでは次第に沿って進めたい。まず本検討会議の趣旨につい  
て、今年の1月30日に行われた入学者選抜方法協議会議、いわゆる  
入選協の結果を踏まえて、事務局から説明をお願いする。

高等学校教育課長 (資料に基づき本検討会議の趣旨を説明)

座長 本検討会議の趣旨について質問はあるか。

(質問なし)

座長 続いて、令和2年度入学者選抜実施結果について、報告をお願いします。

高等学校教育課担当課長 (資料に基づき入学者選抜実施結果を報告)

座長 事務局から報告のあった令和2年度入学者選抜実施結果について、質問はあるか。

(質問なし)

座長 引き続き、入学者選抜制度の現状と課題に関する資料について、説明をお願いします。

高等学校教育課担当課長 (資料に基づいて説明)

座長 事務局から説明があった資料について、質問はあるか。

(質問なし)

座長 それでは、改善に向けての主な視点について、説明をお願いします。

高等学校教育課長 (資料に基づき改善に向けての主な視点について説明)

座長 改善に向けての主な視点について、質問はあるか。

(質問なし)

座長 それでは、これから検討に移る。委員の皆さんから意見をいただきたい。

榊委員 私学の代表としてではなく、思うことを述べる。まず、説明のあった改善に向けた視点はそれぞれ末端のことであって、全体として中学校がどのような入試制度を求めるか、あるいは高等学校

がどのような形で入試を行いたいかということのすり合わせが必要である。どのような入試制度が望ましいかという考えを、まずそれぞれ聞かせていただいた上で、こういうことが望ましいのだという大きな軸を置くべきである。中学校と高等学校で考えていること、入試制度に対する考え方の食い違いがあると、いくら2校受検がよい、1校受検がよいと言っても、すれ違ってしまふ。まず視座を共有することが必要だと思う。

例えば、子どもが安心していろいろ受検できるようにすると、そのことによって受検回数が増え、日程的な過密を招くということが起きる。また、高等学校は第2次選抜になると3月25日頃まで大変だということがある。しかし、中学校からすれば、最後まで学校を選べる場が提供されているということになる。どちらを優先するというわけではないが、大きな枠組みにおいて一致すれば、そのところは仕方ないとなる。

それから、推薦選抜が一般選抜の日程に取り込まれた結果、進路がなかなか決まらないことについての不安が生じたという声がある。一方、アンケート結果では中学校は概ね適切という意見である。だから、テクニカルに何をどうするというよりも、全体として、愛知県の入試制度はこういう方がいいな、ということが示されるとよい。最初に川瀬副座長が話されたような、高校入試が子どもたちの成長にとって重要なポイントになっているという点をどれだけ重視するか、あるいはそれとは別の視点を重視するか、ということにもなる。

欠員のこともある。確かに欠員が増えていることは事実だが、なぜ増えているのか、その背景を探った方がよい。欠員を減らすには「入れ物」を小さくする、あるいは「入れ物」の多様化を図ればよい。30年以上前に作った枠組みを維持しなければと無理やり間尺に合わせようとしても、子どもたちの育ち方、あるいは環境が昔とは違ってきている。全日制ということにこだわらず検討する必要もある。

前の制度改革で一般選抜と推薦選抜を一緒にしたのは、学校教育法施行規則の「特別の事情のあるときは学力検査を行わないことができる」という規定を推薦選抜で広く運用してきたことによる問題があったからで、一般選抜の学力検査と一緒に行うかどうかは別として、推薦選抜でも学力検査は課した方がよいだろう。アンケート結果を見ると、中学校の意見もそうである。

このように幾つかの視点があるが、大枠でどのような入試制度とすることが中学校、高等学校の双方にとってよいことだ、また子どもたちにとってよいことだという、ある程度共通の基盤を作る必要がある。

座長

大局的な視点をもつ必要があるという意見であった。  
他に意見はあるか。

加藤委員

県立高等学校の教職員を代表して発言する。複合選抜制度が実施されて32年が経過した。今回欠員が1,505名にも上ったこと、2校志願率が8割を割り込んでいることなど、現行制度の根幹に関わる課題が山積している。

問題点を三つ述べる。

一つ目は2校志願、2回受検の問題である。これは成績上位層の生徒にとっては安心して受検できる制度だが、成績上位とは言えない生徒、あるいは交通の便のよくない地域に住む生徒にとっては、2校の組み合わせに制約があり、魅力的な制度になっていないと考える。昨今の私学の人気や、公立の合格者発表の遅さで2校受検が減ってきている。

二つ目は学校間格差の問題である。この30年間で輪切りが進んだという受け止めは関係者共通のものである。都心から離れた地域に幾つもの教育困難校、あるいは課題集中校と言われる普通科高校が点在している。中学校の先生から「ここしかない」と言われて1時間以上かけて通学している生徒のことを省みる入試改革にしていきたい。

三つ目は入試業務の負担の問題である。推薦選抜と一般選抜が同一日程となり、文章記述問題の増加などで、800名、900名分の答案を短時間でミスなく採点することは、大変な負担になっている。

こういった問題点を踏まえて4点要望する。

1点目は2校受検の在り方についてである。競争を緩和し、中学生の成長をゆがめない制度とすることを求める。この機会に2校志願、2校受検を見直し、1校志願とすることを求めたい。

2点目は普通科における学区の在り方についてである。1校志願の制度にすれば、多くの生徒が地域の高校へ進学し、地域に根ざした学校づくりを進めることができると考える。そのために、学区の縮小を求めたい。

3点目は推薦選抜についてである。現行の一般選抜と同一日程とする方式を見直し、かつてのような早期実施を望む。また、全校での実施を見直し、推薦選抜は各高等学校の判断で実施を可能とする制度を求める。

最後に入試日程についてである。合格者発表が3月18日というのは、他県と比べても随分遅い。このことで生徒から不安の声も聞かれる。高等学校としても新学期の準備期間が短く、負担が大

きい。1校志願とすれば、合格者発表の前倒しも可能となり、第2次選抜の日程にも余裕が生まれる。

以上4点の見直しを行えば、生徒にとってよりよい制度となり、教職員の負担を中学校、高等学校ともに減らすことができると考える。

座長

地域間、学校間の格差の問題、また、高等学校における入試業務の負担と入試日程の問題に関する意見であった。

他に意見はあるか。

中谷委員

学校教育の現場では、多様性そして子どもの発達ということをとて、とても大事にしている。小学校、中学校、高等学校、それから大学、社会人という接続の部分では、この発達という点を踏まえて丁寧に考えていかなければならない。中学校と高等学校の接続は、子どもたちにとっても、送り出す中学校、受け入れる高等学校にとっても、非常に大きな問題である。これまでの複合選抜制度は、一般選抜で2校に志願できることが大きな安心を生んでいた。この安心という点が、子どもたちの発達により影響を与えてきた。この安心という部分をぜひとも大事にしてもらいたいと思っている。

それとともに、今、中学校も高等学校も、特色ある学校づくりということで、地域に根ざした学校づくりを推進しているところである。そうした特色ある学校づくりの中で、学校が求めるもの、また地域が求めるものは多様であり、それゆえに選抜の基準も多様であってほしいと思う。例えば、学力保障に関しては中学校に任せてもらい、募集人員の全てを推薦選抜で合格させる高等学校があってもよいと思う。また、推薦選抜の基準についても、これからの時代に合った多様なものがあってよいと思う。

座長

多様な選抜基準、そして2校志願できることによる安心が子どもたちの発達にとって大切、という意見であった。

他に意見はあるか。

飯島委員

「2校」受検は、「2回」受検と同義なのか。両者は切り離すことができるのか。例えば、自分の子どもが受けるとき、1回目の受検で失敗しても、もう1回受けられるチャンスを与えてもらえるのは確かにありがたい。しかし、大学入試では多様な選抜方法を行うことが求められる中で、同じような試験を2回行うということはしていない。

附属高校の校長をしていた経験から言うと、同じような試験を

2回するというのは学校現場に大きな負担をかけるので、働き方改革という観点からすると難しいのではないかと思う。複合選抜が始まった頃の状況では、2校受検は2回受検とせざるをえなかったのかもしれないが、現状として、2校受検が2回受検にならざるをえない理由はあるか。

座長

この点については事務局から説明をお願いします。

高等学校教育課担当課長

複合選抜制度が導入された当時は「受検機会の複数化」がコンセプトであった。このときは2校に志願して2校で受検ということが疑いのない前提となっていた。これは技術的な問題も多分にあったと考えている。

飯島委員

現在はどうなのか。例えば、現在の大学入試では、複数の学科を希望できる場合に、データ処理によってどの学科に合格するかをすぐに判定できる。高校入試でも全県の成績データを一括して処理すれば、1回の学力検査の成績を使って2校の可否を判定できる可能性はあると考えてよいか。

高等学校教育課担当課長

技術的に乗り越えなければならないハードルがある。一つは採点の公平性である。1回の試験結果を2校で可否判定に使う場合、別の学校で採点された受検生が同じ土俵に乗ることになるので、学校間で採点基準が一致しているか、すなわち、同じ内容の答案が同じ点数で評価されているかという課題がある。

また、中学校における学習成果を測るため、できるだけ記述式の問題にしたいと考えてきたが、文章で記述させる問題は、学校間で採点基準を統一することが困難なので、そこをどう乗り越えるかという課題がある。

簡単に乗り越える方法としては、大学入試センター試験のように全て記号で答えさせるということが考えられるが、中学校における学習成果を測る方法としてそれが適切かどうかという議論があると思う。

しかし、結論的には、1回の学力検査の成績を2校の可否判定で使うことは、現在においては、技術的にできないことではないと考えている。

座長

2校受検で試験は1回ということに関しては、技術的には可能であるが、問題が全くないわけではないということであった。

他に意見はあるか。

最初に榊委員から、そもそもどのような制度が子どもたちにとってよいのか、中学校と高等学校がそれぞれの立場をすり合わせて、大きな方針を出すべきであるという話があった。また、中谷委員からは、子どもたちの発達という視点を大切にすべきであるという意見があった。私もお二人と同様に、全体的な視点から話をしたい。

高等学校教育に携わる者として心配しているのは、全日制高校への進学者が減りつつあるということである。そのことに危機感を抱いている。

おそらく昨年度、公立中学校の卒業生は前年比で500名程度の減少であったと思う。これは自然減である。しかし、先ほどの入試結果の報告にあったように、全日制の志願者は1,000人を超える減少であった。つまり、自然減の倍の人数が減った。中学校の先生の話を見ると、広域通信制にかなり進学しているのではないかということである。広域通信制がよくないと言うつもりは全くない。多様化した子どもたちに対応し、個別最適化された教育を提供していくことが求められる流れの中では、多様な学習環境から子どもたちが自ら選択することが望ましい。また、さまざまな事情で全日制に通えない生徒もいると思うので、そうした生徒の選択を決して否定するつもりはない。

ただ、多様な学習環境とは言いながら、社会性を養っていくことも生徒の発達という観点からは重要であり、集団の中で個を伸ばしていくという全日制の学校がもつ本来の機能は大事にしていかなければならない。長い目で見たときに、他者と生活をともにしながら成長していくという点で、全日制高校は大切な教育の場であると思っている。

そういった教育の場から生徒が離れていく、つまり、全日制高校が選ばれない傾向が強まってきたのはなぜか。我々としても多様な選択肢を提供し、全日制高校をさらに魅力的なものにしていく努力を継続していかなければならない。欠員数の多さが入試制度だけによってもたらされるものではないにしても、入試制度を受検生にとって魅力的なもの、あるいは受検しやすいものにしていく必要がある。

このように考えると、例えば推薦選抜と一般選抜が一体化したことにより——もちろん各高等学校は厳正に選抜を行い、推薦選抜で合格したのか、一般選抜で合格したのかを示しているが——外から見たときに、どういうプロセスで選抜されているのかということが見えにくくなっていることは事実である。受検生の視点から制度自体がどう在るべきかということ、一度検討してみる必要がある。

また、愛知県の入試制度を生徒のニーズの多様化に対応したものにする、より魅力的なものにする、受検しやすくするという観点から、例えば、他県で導入が進んでいる自己推薦型の特色選抜を取り入れていくことも考えるべきではないか。

ぜひ、多様なニーズをもった生徒たちに全日制高校の魅力がきちんと伝わるような入試制度改革になればと思う。

座長

広域通信制に進学する流れが生じている中で、全日制高校の、集団の中で社会性を育成する特徴と魅力を今以上に打ち出していく必要があるのではないかということ、そうした視点からは、今の推薦選抜と一般選抜が一体化した制度は、多様化への対応という点で望ましくないという問題提起であった。

他に意見はあるか。

齋藤委員

推薦選抜と一般選抜が一体化されていることへの問題提起があったが、高等学校の現場からはもともと意見が出ている。現行制度になって以来、選抜作業に大変苦勞し、時間がかかるようになっている。先ほど記述式の問題の話があったが、高等学校にとってはこの記述式問題の採点が特に負担となっている。

旧制度のもとでの採点は、学力検査が終わった後、夕方から夜にかけて作業し、その日のうちに大体一通りはできるという感じであった。現行制度になってからは、それでは終わらない。翌日の面接の後にも採点作業を続け、それでも終わらない場合はさらに翌日まで続く。そうすると問題は在校生の3月の日程である。旧制度では2月に行っていた推薦選抜を一般選抜と一緒にやることになって、3月の選抜作業の日程が長くなり、2月の終わりから3月の初めにかけて行っていた学年末試験を前倒しするような動きになってきた。現行制度では2月の末に学年末考査が終わっていないと、採点をして成績を出すという作業が、入試の前に終わらない。旧制度ではそこまでしなくても、入試の選抜作業と、在校生の成績をつける作業を並行してできていた部分があったが、現行の制度ではそれは無理である。全力を入試の採点と選抜作業に注がなければならない状況になった。そうすると、どうしても在校生の指導計画に影響が出て、学年末考査を早めようという話になる。すると犠牲になるのは1月と2月である。学校行事は何も入れられない。全部授業をやらなければならない過密日程になる。では、行事はどうするか。入学者選抜が終わった後にもっていくということになり、3月はほとんど授業ができない。こうした非常にいびつな指導計画になってしまっている。今年の場合は、新型コロナウイルスによる臨時休校で生徒は3月にほとんど登校



しなかったが、高校は事実上、授業への影響がなかった。それは、皮肉なことに、入試のために3月はほとんど授業がないからである。

こうしたことから、現行の入試日程は、高校の在校生にとっては、なかなか厳しいものとなっている。

座長

入試業務が3月に集中したことにより、高等学校の在校生にしわ寄せがいつているという指摘であった。

他に意見はあるか。

早川委員

基本的に、子どもたちの多様な個性を生かすことのできる、学力だけによらない、いろいろな評価の仕組みが必要だと思っている。そのような多様性を大切にするという視点に立ったとき、推薦選抜が一般選抜と同時に行われるようになったことについては、いかがなものかと思う。

中学校現場の授業の落ち着き具合という観点からすると、以前は私立の一般選抜が終わるとすぐに公立の推薦選抜が2月20日ぐらいにあり、その直後からまた一般選抜の出願というように、日程的には非常に厳しいものがあった。現行制度になって、推薦選抜を一般選抜と同時に行うことによって、そこに少し落ち着きが生まれたということはある。

ただ、推薦選抜の志願者が一般選抜も同時に受けるということについては、多様な個性を認めた上で選抜していくということからすると、やはり課題があると思う。

座長

中学校から見ると、推薦選抜と一般選抜を一体化することにはメリットがある一方で、多様な個性を認めて選抜するという推薦選抜の趣旨をやや削いでいる面があるという、両面の指摘であった。

他に意見はあるか。

榊委員

補足的に話をする。柴田委員から、広域通信制に生徒が流れているという話があった。また、加藤委員の話にあったように、私立高校への入学者も大体同じくらい増えている。これは、私学がさまざまな面で評価されるようになってきたということもあるかもしれないが、授業料の無償化という面で、愛知県に大変幅広く支援してもらったということがあったと思う。私立と公立で授業料が同等の条件になると、どちらが学校として魅力的かということになる。

それから中学校の方がいるのでちょっと言いにくいですが、前回の

制度改善で入試日程を短縮した理由には、入試でどんどん2月の授業を取られてしまう、だから少しでも授業時間を確保してほしいということがあったと思う。そのために、一般選抜と推薦選抜が一緒になったという側面もあった。

さらに申し上げにくいですが、中学校の卒業式の日程も関係している。これも平成24年度の検討会議のときに、全国的に中学校の卒業式がどんな日程で行われているかという資料が示されて、卒業式の日程に工夫をすれば、合格者発表を含めた日程がもう少しスムーズになるということがあった。もちろん、中学校における卒業式は非常に重要なものだと思うが、入試日程に影響しているということを申し上げておきたいと思う。

座長

中学校の卒業式をどこで行うのかということが、実は入試の在り方を考える際に避けて通れないということ、あえてご指摘いただいた。

他に意見はあるか。

青木委員

最初に事務局から、2校受検が可能な制度が概ね県民から理解され、評価されているという説明があった。長い間続いてきているということで安定し、安心できる、そういう制度になっていると思う。アンケート結果を見ると、いろいろ改善すべき点が指摘されているが、現行制度が概ねよいとする意見も少なくはないと思う。改善点として上がってきている声だけを取り上げて、安易に改善、改善というのではなく、2校受検の制度が長く続いてきている背景、それから、アンケート結果で概ね現状のままでよいという意見の数値を幅広く捉えて、議論をしていけるとよい。

それから、今後の議論になってくるとは思うが、本日、改善の視点が示された。最終的にどのような着地点に行き着くのか、例えば、欠員というものを大きな課題として捉えるのか、それとも子どもたちにとってよりよい入試制度となるように改善するのか、それによって話し合いの内容が変わってくると思う。榊委員が先ほど言われたように、ポイントを絞った議論ができるとよい。

座長

現行制度のよい点は尊重すべきだという意見であった。また、着眼点を明確にした上で議論していくべきである、という提案であった。

鈴木委員

複合選抜が随分と長く続いており、メリット、デメリットがあるが、受検生にとってはメリットがやはり大きいと感じている。ただ、30年以上続く中で改善が繰り返され、最近「複合」選抜

というよりは「複雑」選抜になってきたと感じる。非常によい面もあるが、もう少しシンプルな入試制度にするべきである。私たち高等学校の現場にとっても、受検生にとっても非常にわかりにくいところがあると思う。この複合選抜を少しリセットしながら、よりシンプルな入試は何かということを考えてらどうか。

座長

よりシンプルな選抜制度を目指すべきであるという意見であった。

他に意見はあるか。

須田委員

私が勤務している高等学校は名古屋市のすぐ北の春日井市に立地している。この地域では中学校と私立を含めた高等学校が、普段からかなり緊密な連携をしており、さまざまな情報を交換している。中学校へ出向いて行う説明会もきめ細かく実施されている。JR中央線による交通の便が非常によいため、かつては名古屋市内への進学希望をもつ生徒が多くいた。しかし、中学校の校長先生方から、近年は地域の高等学校への進学希望が高まっているという話をよく聞く。

しかし、実際には地域の高等学校に進学する生徒の人数は減っている。気持ちは地域の高等学校に向いているが、実際の出願状況は異なっている。このことについて中学校の校長先生方に聞いてみると、全日制でも定時制でもない進路希望をもつ生徒が各中学校に何人かいて、その人数を合計すると結構な数になるという。

今の受検生は、幼い頃から、個性や多様性が尊重された指導を受けてきた。高等学校でもそうしたことを尊重して指導し、それぞれの生徒たちのもつ進路目標をいかに叶えるかに力を尽くしているが、生徒の多様性や個性を尊重して伸ばしていくということをより一層明確にし、それを受検生にわかりやすく説明していくことが必要だと思っている。

入試の中で個性あるいは多様性がどのように評価されるのが受検生に明確に伝わらないと、地域の高等学校への出願につながらないのが現実である。そこに進路が決定する時期が遅いという不安が重なる。合格者発表の時期が遅いというのは、受検生、保護者にとって大きなマイナス要素だと思う。

多様な能力を測るという推薦選抜のメッセージ性が、一般選抜と推薦選抜を一体化したことによって受検生にどのように捉えられているのかを改めて検証し、入試の改善につないでいかなければならないということ、地域の学校で仕事をする中で強く感じている。

座長

今の生徒たちは個性や多様性を重視する教育を受けてきており、そのことが入試の中でどう評価されるのかということ、きちんとメッセージとして出していく必要があるのではないか、という意見であった。

他に意見はあるか。

澤田委員

事務局に尋ねたい。資料のグラフにある、普通科どうしの2校志願率と、専門学科と普通科、専門学科どうしの2校志願率の推移の違いについて、どのように解釈しているか。

高等学校教育課担当課長

まず①の普通科どうしのグラフであるが、現行制度になって大きく下がった理由は、推薦選抜の志願者の中に、公立の高校は推薦で受ける学校でなければ入学したくないという強い志望をもった生徒が一定数存在し、そうした生徒の第2志望校が私立高校であったために、公立の2校目には出願しなかったケースが少なくなかったためであろうと推測している。グラフから見ると志願者実数の5%程度、2,000人ぐらいである。

また、②のグラフで、専門学科・総合学科に出願した生徒の2校志願率が増加していることについては、専門学科・総合学科の推薦選抜の定員枠が募集人員の30%程度から45%程度と普通科よりも多く、現行制度となってから推薦選抜の志願者も一般選抜を受検するようになったため、受検者数自体が3割程度増えたことによる。学科の特性上、普通科と比べて私立高校と競合することが少ないことも影響していると考えている。

澤田委員

よくわかった。やはり2校志願率の①と②のグラフの違いには、推薦選抜に対する潜在的な需要が表れているのではないかと思われる。先ほどから多様な尺度による評価というキーワード、また2校受検できることによる安心というキーワードが出ているが、その両方を実現する制度であってほしいという潜在的なニーズが高いことを示すグラフになっていると私は推測する。

また、アンケートの推薦選抜を一般選抜の日程に取り込んでいくことに対する質問項目において、現行が概ね適切という回答の割合が中学校と高等学校で大きく異なる点が悩ましい。概ね適切と考える高等学校が10%を切っているという結果を見ると、いたたまれない気持ちになる。個性をもった生徒を受け入れるためにどれだけ準備をして臨んでも、推薦選抜が一般選抜に組み込まれている中では、そうした高等学校の思いが生きてこない。学力以外の要素を重視したい高等学校ほど、しっかりと準備をして推薦選抜に臨んでいると思うが、制度変更によって受検生のニーズと

のすれ違いが生じてしまったことへの残念な気持ちが表れている。

受検生にとっての安心や多様なニーズへの対応という点で、よりよい入試制度になるとよいと思う。

座長

それぞれの立場から、さまざまな意見を大変活発に出していただいた。次回は、委員の皆さんから頂戴した意見も踏まえながら、改善の方向についての具体的な検討に入りたいと思うが、その検討を効率的に行うために、開催要綱第6にあるワーキンググループを設置して、専門的な知見に基づいた資料を作成してもらおうと思うが、どうか。

(異議なし)

座長

それではワーキンググループを設置して具体的な検討のための資料を作成してもらうことにする。事務局でワーキンググループの委員についての案があれば示してほしい。

(ワーキンググループの委員についての案を事務局から配付)

高等学校教育課長

ワーキンググループの構成案について説明申し上げる。

本検討会議の委員である愛知教育大学の飯島様と中京大学の澤田様を始め、公立の高等学校及び中学校の校長先生方で構成した案である。

座長

このワーキンググループの構成案について意見はあるか。

(意見なし)

座長

それでは案に示されている方々にワーキンググループでの作業をお願いします。ワーキンググループをリードしてもらうことになる飯島委員、澤田委員にはさまざまなデータや意見を踏まえて論点を十分に整理し、次回以降、建設的な議論が可能となるような資料の作成をお願いします。

ところで、次回の検討会議の日程について、事務局はどのように考えているか。

高等学校教育課担当課長

ワーキンググループの進捗にもよるが、第2回の検討会議は8月下旬から9月上旬の間に行いたいと考えている。

座長

了解した。ワーキンググループの進捗状況を見て、各委員に次の会議日程の連絡をお願いしたい。

なお、今回は改善の具体案について検討を行うことになる。開催要綱第8の「検討会議は、座長の判断により、検討会議の一部又は全部を公開しないことができる」という規定に基づき、ワーキンググループでの資料作成を含めて非公開で行うこととしたいが、よいか。

(異議なし)

座長

それでは、ワーキンググループと今回の検討会議は非公開で行うこととする。

本日は本当に熱心に検討いただき感謝する。この後は事務局でお願いしたい。

閉会の挨拶

愛知県教育委員会教育長

閉会

高等学校教育課課長補佐